

第3者意見



敬愛大学
経済学部経営学科 教授
博士（経営管理学）
栗屋 仁美様

【読み手目線のCSR報告書】

中特グループのCSR報告書は、読者の目を引くキャッチャーな表紙より始まります。ページをめくると恒久の企業理念、そして目次がありますが、目次はISO26000のどの項目に該当するかも記載されており、読み手目線であることがここでもわかります。CSR報告書として非常に優れた点です。

【中特グループとCSR】

勘違いされやすいのですがCSRは、社会貢献ではありません。CSRとは、事業を通して社会に役立ち、世の中のサステナビリティ（持続性）に寄与する経営行動のことです。中特グループの事業は社会に絶対的に必要なものであり、時流に左右される一過性のCSRではないことに大きな特徴があります。事業の具体は、私たちが不要と判断したものを、適切に物流にのせ処理あるいは再資源化するものです。

資本主義社会は生産・消費というものづくりには長けていても、使用したその後についてはあまり意識を向けません。しかし使用後を放置すると、かっこよく言えば経済の循環が滞る、柔らかく言えば世の中がゴミだらけになります。例えば、畳やフローリングの上が埃や屑、汚泥で溢れた状態ということです。中特グループは私たちの不要なものを、笑顔で引き取り運搬し、適切に処理・再資源化、かつ生活に潤いを与えています。よって仕事そのものが、まさにCSRなのです。

【理念とCSRの統合】

中特グループが使命として掲げる企業理念のとおり、同社への積極的な仕事への取組みが「生活環境革命」であり、私たちに「幸せ」に導くものです。中特グ

ループは、経営者と従業員の風通しが良く、社内から生まれるアイデアを宝とし、それらを具現化することでビジネスモデルのアップデートを行っています。よって、企業理念を堂々と胸を張って言えるのです。2020年夏、中特グループのロゴマークを一新したことによるホールディングスの結束力の高揚は、理念の浸透を促進することでしょう。

【ステークホルダー】

CSRの基本は、ステークホルダーとwin-winの関係を保ちながらビジネスを進めることです。中特グループはステークホルダーを、環境、地域社会、お客様、従業員、そして次世代とし、各々とwin-winを築いています。特に次世代に対しては、SDGsの17項目に即し昨年までより2項目増加したNEXT17Targetsを定め、達成度を明確に記しています。ステークホルダーに対する配慮の具体事例には、山口県の「体験の機会の場」の認定制度の登録第一号や、ISO45001のグループ全社による取得などがあげられます。

【期待すること】

CSRは言葉が一人歩きする概念のため、意識共有のため次の点を期待します。本業におけるCSRの深耕、それに伴うCSRとSDGsとの関係性の整理です。CSRとSDGsは別物ではなく、CSRの結果がSDGs項目への貢献です。よって両者の関係性の整理は、中特グループ全社のモチベーション向上につながるとともに、社会に対するCSRの本質の普及にもなるでしょう。継続のために変化し続ける中特グループを応援しています。

第3者意見を受けて

中特グループが取り組んでいるCSR活動について明確な意味理論付け・的確な意識付けされ、自信を持ったところがあります。私たち自身があまり詳細な意味意義がわからず、地域社会のためだろうと考え行動していることにアカデミックにご意見いただき感謝いたします。また、修正し考えを明確にして取り組むべき視点も見えてきましたので、本業とCSRとSDGsの関係性整理明確化と深化を進めていきたいと思えます。

CSR推進室 遠藤 清治